

研究報告

プロ野球アカデミー事業のプログラム評価に関する事例研究
—ドラゴンズベースボールアカデミー保護者の満足度調査からの検討—

二瓶 雄樹*

Case Study on the Evaluation of Programs in Professional Baseball Academy Projects
— Discussion based on a research on the satisfaction of the parents of
children participating in the Dragons Baseball Academy —

Yuki NIHEI

I. 緒言

野球人口減少が話題にのぼる近年、これに歯止めを掛けることを目的の一つとして、プロ野球下部組織のアカデミー事業が全国各地で展開されている。本研究は、このアカデミー事業を対象とし、参加する生徒の保護者に調査を実施した。その結果からアカデミー事業における満足度の変化と各スクールにおける満足度の差について検討する。

1) プロ野球球団のアカデミー事業

プロ野球読売ジャイアンツは、2006年に国内における野球スクール事業（主に若年層等を対象としたスクール）「ジャイアンツ・アカデミー」を発足させた。この発足を皮切りに、現在ではプロ野球12球団中、11球団が様々な形態のアカデミー事業を実施している（2018年9月現在）。その事業形態を見てみると、アカデミーのタイプは大きく二つに分類できる。一つ目は指導型である。このタイプは特定の場所、時間（大半は平日の放課後）に開催されるプログラムであり、指導者が実際に子供たちを指導する形式のアカデミーである。指導する内容としては野球

のみを取り扱うものから、複数の種目（野球の他ソフトボール、チアリーディング、フィットネス）を取り扱うものも存在する。もう一つのタイプは動画提供型で、元プロ野球選手や現役プロ野球選手による技術指導を動画で録画して提供している形式のアカデミーである。このタイプは、更に、テレビで配信されているもの、インターネットで配信されているもの、DVD（前出を録画編集したもの）として提供されているものに分けられる。アカデミーの運営形態としては、球団直営型、事業委託型、NPO法人型の3つのタイプに分けられる。さらに、アカデミーの指導者については、元プロ野球選手中心、元プロ野球選手+職員・アルバイト、職員・アルバイト中心、現プロ野球選手中心（動画提供型）に大別できる。

2) ドラゴンズベースボールアカデミー

本研究で扱う「ドラゴンズベースボールアカデミー」は事業タイプとしては指導型で、種目としては野球のみを指導内容とするタイプである。また組織的にはNPO法人化しており、元プロ野球選手が指導者の中心的役割を担うアカデミーとなっている。本アカデミーの理念（表1）

*中京大学スポーツ科学部

表1 各スクールの詳細

スクール	曜日	会場	コース	時間	月会費
A校	月曜日	愛知県：愛知池運動公園野球場	キッズ	16：30～17：30	¥5,000
			ジュニア	17：40～19：00	¥6,000
B校	火曜日	愛知県：パロマ瑞穂スポーツパーク	キッズ	16：30～17：30	¥5,000
			ジュニア	17：40～19：00	¥6,000
C校	水曜日	愛知県：岡崎市中央総合公園野球場	キッズ	16：30～17：30	¥5,000
			ジュニア	17：40～19：00	¥6,000
			エキスパート（軟式）	19：10～20：30	¥9,000
			エキスパート（硬式）	19：10～20：30	¥12,000
D校	水曜日	愛知県：リミックスベースボール室内練習場	エキスパート（軟式）	16：00～17：20	¥9,000
			エキスパート（硬式）	17：30～18：50	¥12,000
E校	木曜日	愛知県：刈谷球場	キッズ	16：30～17：30	¥5,000
			ジュニア	17：40～19：00	¥6,000
			エキスパート（軟式）	19：10～20：30	¥9,000
F校	金曜日	岐阜県：八ツ草球場、もえぎの里多目的体育館	キッズ	16：30～17：30	¥5,000
			ジュニア	17：40～19：00	¥6,000

注1. 初年度の入会金20,000円、次年度からの年会費5,000円は全校共通である。

に関しては、「野球の普及、野球選手の育成、野球振興などの活動を通じて、楽しさを体験してもらい、スポーツの価値を高めます。そして野球をする人、ささえる人、みる人の輪を広げます。」とされ、野球を通して、スポーツの価値自体を多くのステークホルダーを巻き込んで振興していくことが掲げられている。また事業目的(表1)として、「社会貢献」「こどもの健全な育成及び体力の向上」「安全・安心な運動環境の提供」「地域社会との交流、地域や企業との協力」「元プロ野球選手のセカンドキャリア支援及び指導者育成」の5点が掲げられており、これらの目的達成のための取り組み方をスクールコンセプトとして打ち出してしている。これらのコンセプト(表1)は、以下の8点から成っている：①人間性を伸ばす、②体力をつける、③基本を徹底する、④学びの環境を整える、⑤誰にでも分かる伝え方をする、⑥こどもの発育発達のメカニズムを重視する、⑦こどもの記憶が定着するように工夫する、⑧運営改善のためにPDCAを実践する。このようにドラゴンズベースボールアカデミーは、明確な理念とそれに付随する5つの目的、そしてその目的を達成するための8つのスクールコンセプトを持った非営利特定法人(NPO法人)である。

表2 回答者(保護者)の属性

		回答者(保護者)	
		n	%
年度	2016年度	247	54.2%
	2017年度	209	45.8%
性別	男性	140	30.7%
	女性	316	69.2%
年齢	平均	42.5歳	
	SD	7.5	
	最年長	76歳	
	最年少	26歳	
	20歳代	3	0.7%
	30歳代	152	33.3%
	40歳代	258	56.6%
	50歳代	13	2.9%
	60歳以上	20	4.4%
	NA	10	2.2%
中日ドラゴンズのファンか否か	ファン	361	79.2%
	ファンではない	76	16.7%
	NA	19	4.2%

スクールと呼ばれる学校は、愛知県内に5箇所と岐阜県に1箇所、計6箇所開設されている。それぞれ決められた曜日(平日)に開講され、コースと呼ばれる年齢グループ、目的別のクラスに別れて野球の指導が行われている。指導者は元プロ野球選手が中心で、それぞれ担当のスクールで複数のコースを受け持ち、指導を行っ

ている。異なる場所、曜日、指導者でありながら生徒の受講料は同額である。異なる場所で同額のサービスを提供する点において、フランチャイズ事業の一面を有していると考えられる。表2は本アカデミーのスクール・曜日・会場・コース・時間・会費（入会費・年会費・月会費）を示した。

3) アカデミーの運営改善活動

ドラゴンズベースボールアカデミーでは、発足した2016年度から前述したスクールコンセプトの一つである「運営改善のためにPDCAを実践する」を行っている。年度計画を示し(Plan)、それらを実行(Do)した後、生徒の保護者を対象に質問紙調査を実施(Check)し、その回答結果をもとに「プログラム修正」として改善策、新規事業の導入(Action)が講じられ、2017年度計画を立案(Plan)、全スクールで「プログラム修正」が実施された。その「プログラム修正」の内容は以下の6点である。

(a) マンパワーの改善

2016年は指導者が2名と球団から派遣されたスタッフ1名、そして専門学校生のインターンによって運営された。2017年は指導者を3名に増員し、専門学校生のインターン教育を強化、それに加え練習の補助を担うボランティアを活用し、マンパワーの充実を図った。

(b) 礼儀・挨拶・マナーの改善

2016年は各校毎に礼儀や挨拶に関する指導(方針)は任されていた。2017年からはアカデミー(全スクール)として、練習前後に整列させ大きな声で指導者、スタッフ、保護者にお礼、挨拶することを実施した。またグラウンド内は駆け足で移動することや道具は整理整頓させることも全校統一のこととして指導した。

(c) 指導内容の改善

2016年は講師それぞれが有している指導論、方法に任せ運営していた。2017年は走・攻・守毎にテーマを決め、そのテーマ毎に3回分の練習プログラムを実施、そして4回目

にテーマに即したゲームを取り入れた。テーマに即した練習を3回、その後実践で成果を確認する、「1テーマ4回制」を導入した。また授業毎にテーマを具体的かつ分かりやすく生徒に伝えることを徹底し、生徒から保護者にどのようなことを指導されたのか伝え易くする工夫も加えられた。

(d) コース内でのグループ分け制度の新規導入

2016年は、生徒間でレベル差があっても同様の練習方法を全員一斉に実施していた。2017年からは、コース内でレベルを設定し最大3グループに分け練習を実施した。グループは1テーマが終わる4回目の授業の後に見直し、必要に応じてメンバーの入れ替えを行った。

(e) 予備日の新規導入

悪天候もしくはグラウンドが使用できない場合、開講日にも関わらず実施できない場合があった。2017年はそのような場合に対し、予備日を設け改善を図った。

(f) Tボール大会参加の新規導入

2017年度から全てのキッズコースではTボール大会に参加することとなった。本アカデミーが主眼を置いている個人技術の向上に加え、Tボールゲームでのチームプレイやゲーム戦術を学習することを可能とした。またTボール大会の規定により、数名の保護者もゲームに参加することとなり、親子間のみならず保護者間での交流、親睦も可能となった。

4) 先行研究

プロ野球の下部組織であるアカデミー事業や同じプロスポーツのJリーグの下部組織であるスクール事業に関する研究や報告については、それほど多くないのが実情である。

プロ野球のアカデミー事業に関しては、石田・倉俣(2014)の報告があり、ジャイアンツ・アカデミーで実施されている技術指導の事例を紹介している。投げる・打つ・走るのそれぞれの技術目標を掲げ、その目標を達成するためのドリル(練習方法)を紹介したものである。ま

たジャイアンツ・アカデミーは、2014年3月に同アカデミー会員向け会報紙（名称：アカデミー通信）の中で、満足度調査（質問紙調査）の結果を明らかにしている。この結果では、アカデミーについて高い満足度が示されている。一方で、調査対象者が明確ではなく、さらにその結果がどのように活用されたのかについても明らかにされていない。その他、プロ野球のアカデミー事業に関する研究や報告は見当たらない。

同じプロスポーツの下部組織のスクール事業に関する研究としては、Jリーグサッカースクールに関する研究がある。松永ら（2006）は新規生徒と継続生徒に着目し、その特性とプログラム評価についての比較分析を行っている。その中で、受講生である生徒のサッカースクールの評価や要望を明らかにし、その結果から新規生徒を獲得するための方法について言及している。また井澤ら（2006）の研究では、保護者を対象にそのスクールに対する満足度について検討している。彼らは満足度によって保護者を低群・中群・高群の3つのセグメントに分け、そのセグメント毎に比較分析を行っている。その結果、満足度を向上させる取り組みとプログラム評価の継続的な取り組みの必要性について指摘している。これら2つの研究では、新規生徒を獲得するための方法や満足度を向上させるための取り組みの必要性について言及されているものの、その具体的な方法については明確にされていない。またその後の取り組みについて、継続した研究や報告は見当たらない。

5) 本研究の目的

前述したようにプロスポーツの下部組織を取り扱った研究ではJリーグサッカースクールを対象とした研究があるが、この研究が生かされ、また次年度以降にその内容が反映されたかの可否かは明らかにされていない。本研究で対象とするドラゴンズベースボールアカデミーでは、2016年度質問紙調査を実施し、その結果から改善策として「プログラム修正」を実行した。2017年度も同様の継続的な運営改善のためにPDCAの実践を必要としている。以上のこと

から、本研究はドラゴンズベースボールアカデミーの保護者を対象に2016年度と同様の質問紙調査を2017年も実施し、その変容を明らかにすることを目的とする。具体的には、(1) 2016～2017年度における満足度の変化を明らかにすること、(2) 2017年度の各スクールにおける満足度を明らかにすることの2点である。この研究は、プロスポーツの下部組織のスクール事業に関する研究として貴重な知見をもたらすと共に、スポーツ組織のPDCAサイクルを循環させる方法として有効な方法論を示すと考えられる。

II. 研究方法

1) 調査方法

ドラゴンズベースボールアカデミーの保護者を対象に直接手渡し直接回収による質問紙調査を実施した。質問紙調査の期間は2017年10月下旬～11月上旬（約一週間）であった。調査実施にあたり、まず保護者であることを確認し、その保護者に当該調査の主旨を説明、その後①この質問紙調査に回答することは義務的な活動ではないこと、②無記名の調査であり回答は、統計的に処理され個人が特定されることがないことを確認し、理解を得た上で実施された。

本来このような満足度調査は、同一対象者の集団を継続的に調査し、その差を検証すべきである。しかし、本研究は月毎に契約を更新される会員を対象としている事例研究であるため、同一対象者の集団の差を検証することは困難であることを付け加える。

2) 調査項目

質問紙調査において設定した質問項目は以下の通りである。

- ①回答者（保護者）の属性
 - a. 性別
 - b. 年齢
 - c. ドラゴンズファンか否か
- ②アカデミープログラム満足度
 - a. 練習環境に対する満足度

- b. 指導者に対する満足度
- c. スクール料に対する満足度
- d. 練習内容に対する満足度
- e. 練習時間に対する満足度

4) データの分析

プログラム満足度に関する調査項目は、それぞれ「1 (不満) -2-3 (普通) -4-5 (満足)」の5段階で尋ねた。この尺度は本来、順序尺度を構成するものであるが、今回は間隔尺度を構成するものと仮定して分析を進めることとした。各「満足度」尺度のレンジは1~5である。また5つの満足度調査項目のスコアの総和（合成得点）を求め、「総合満足度」として位置付けた。この「総合満足度」尺度のレンジは5~25である。

収集されたデータは、統計分析ソフトウェア (SPSS Statistics Ver.23) に入力し、2016年度と2017年度のデータ、そして各スクールのデータの比較分析を行った。比較分析では、対応のない2群間のt検定および、一元配置の分散分析を用いた。尚、統計的有意水準は5%に設定した。

Ⅲ. 調査結果及び考察

1) 回答者（保護者）の属性

表3は回答者の属性を表したものである。2016年度の回答者は247名(男性75名、女性167名)で、2016年度10月時点の登録生徒数の84.3%であった。2017年度の回答者は209名(男性63名、女性146名)で、2017年度10月時点の登録生徒数の65.2%であった。回答者全体での平均年齢は42.5歳 (SD 7.5) で最年長は76歳、最年少は26歳であった。最も多い年代は40歳代で258名 (56.6%)、次いで30歳代152名 (33.3%)であった。

2) 2016年度と2017年度の満足度比較（総合/各項目）

表4は2016年度の「総合満足度」と5項目の満足度、そして2017年度のそれを比較したものである。その結果、平均値の差において全ての項

表3 生徒の属性

	生徒	
	n	%
所属校	A校	71 15.6%
	B校	91 20.0%
	C校	80 17.5%
	D校	33 7.2%
	E校	102 22.4%
	F校	79 17.3%
コース	キッズ	167 36.6%
	ジュニア	210 46.1%
	エキスパート	72 15.8%
	NA	7 1.5%
学年	小学1年生	46 10.1%
	小学2年生	61 13.4%
	小学3年生	57 12.5%
	小学4年生	95 20.8%
	小学5年生	101 22.2%
	小学6年生	65 14.3%
	中学1年生	16 3.5%
	中学2年生	7 1.5%
	中学3年生	3 0.7%
	NA	5 1.1%

目で2017年度が2016年度の平均値を上回っていること、そして「総合満足度」でも2017年度の満足度が有意に高くなったことが明らかとなった。これらのことから、全体的にみると2016年度の満足度よりも2017年度の満足度が向上したことが伺える。次に項目毎にみると全ての項目平均において、2017年度の満足度が有意に向上したことが明らかとなった。また「練習環境」を除く、4項目（「指導者」「スクール料」「練習内容」「練習時間」）において、2017年度の満足度が有意に向上した。

以上の結果は、アカデミー事業が2年目を迎えたことによる、スタッフ陣の適応能力向上や講師陣の指導力向上など、経験による影響が少なからず関係していると考えられる。加えて、前述した「プログラム修正」が、直接的、間接的、副次的な効果を生み出したとも捉えることができる。以上のことから、満足度向上の具体的な効果を検証することはできないものの、アカデミー全体として2年目の取り組みが好影響

表4 満足度年度比較

	2016年度			2017年度			t 値	平均値の差 (I-J)
	n	平均 (I)	SD	n	平均 (J)	SD		
練習環境	226	4.45	0.84	207	4.49	0.84	0.45	-0.04
指導者	225	4.47	0.76	207	4.61	0.69	1.97*	-0.14
満足度 スクール料	223	3.75	0.96	207	3.98	0.98	2.38*	-0.23
練習内容	223	3.78	0.95	206	4.13	0.90	3.91**	-0.35
練習時間	225	3.46	1.12	206	3.74	1.05	2.63**	-0.28
総合満足度	220	19.88	3.27	205	20.92	3.16	3.34**	-1.04

注1. 満足度の練習環境、指導者、スクール料、練習内容、練習時間、平均値の幅は1～5であり、1不満、2、3普通、4、5満足を示している。

注2. 総合満足度の平均値の幅は5～25であり、満足度5項目の総和を示している。

注3. *p<.05、**p<.01

注4. 平均値の差は2016年度平均 (I) -2017年度平均 (J) の値を示している。

を与えていることを示している。

3) 2017年度の各スクール間満足度の比較(総合)

表5は2017年度の各スクールにおけるスコアの総和である「総合満足度」を比較したものである。最も「総合満足度」が高かったスクールはC校22.32(SD2.17)で、ついでB校21.29(SD2.69)、A校21.24(SD2.89)、E校20.64(SD3.61)、D校19.75(SD2.44)、最後はF校19.77(SD3.77)の順であった。t検定を行なった結果、B校とD校、B校とF校の間に5%水準で有意差が認められた。またC校とD校、C校とE校、C校とF校の間に1%水準で有意差が認められた。

以上の結果は、フランチャイズ事業の一面を有しているこの活動にとって、改善する必要性が高い結果であると考えられる。つまり、同額でサービスを提供している事業にも関わらず、スクール間で満足度に明らかな差が生じてしまっている。そのため、このスクール間の差が何に基づくものであるのか今回の調査からは特定できないが、フランチャイズ事業のサービスの質を維持していく上で、この差を改善する必要性は高いと考えられる。さらに、満足度の高いスクールを他のスクールが学ぶことも大変有益であると考えられる。今後、より詳細な調査と分析が求められると共に、スクール間の横の繋がりが構築、強化されることが望まれるので

表5 A校の満足度年度比較

	2016年度			2017年度			t 値	平均値の差 (I-J)
	n	平均 (I)	SD	n	平均 (J)	SD		
練習環境	39	4.59	0.75	29	4.59	0.68	0.02	0.00
指導者	39	4.46	0.76	29	4.66	0.55	0.16	-0.19
満足度 スクール料	38	3.66	0.99	29	3.76	0.91	0.42	-0.10
練習内容	39	3.51	0.97	29	4.28	0.84	3.39**	-0.76
練習時間	39	3.59	1.12	29	3.97	1.05	1.406	-0.38
総合満足度	38	19.76	3.44	29	21.24	2.89	1.867	-1.48

注1. 満足度の練習環境、指導者、スクール料、練習内容、練習時間、平均値の幅は1～5であり、1不満、2、3普通、4、5満足を示している。

注2. 総合満足度の平均値の幅は5～25であり、満足度5項目の総和を示している。

注3. *p<.05、**p<.01

注4. 平均値の差は2016年度平均 (I) -2017年度平均 (J) の値を示している。

表6 B校の満足度年度比較

	2016年度			2017年度			t 値	平均値の差 (I-J)
	n	平均 (I)	SD	n	平均 (J)	SD		
練習環境	45	4.67	0.64	43	4.81	0.55	1.16	-0.15
指導者	45	4.38	0.72	43	4.70	0.51	2.41*	-0.32
満足度 スクール料	44	3.75	0.94	43	3.91	0.97	0.76	-0.16
練習内容	44	3.57	1.07	42	4.14	0.93	2.66**	-0.58
練習時間	44	3.30	1.09	42	3.81	1.07	2.21	-0.51
総合満足度	43	19.65	3.10	41	21.29	2.69	2.58**	-1.64

注1. 満足度の練習環境、指導者、スクール料、練習内容、練習時間、平均値の幅は1～5であり、1不満、2、3普通、4、5満足を示している。

注2. 総合満足度の平均値の幅は5～25であり、満足度5項目の総和を示している。

注3. *p<.05、**p<.01

注4. 平均値の差は2016年度平均 (I) -2017年度平均 (J) の値を示している。

表7 C校の満足度年度比較

	2016年度			2017年度			t 値	平均値の差 (I-J)
	n	平均 (I)	SD	n	平均 (J)	SD		
練習環境	40	4.63	0.59	34	4.65	0.65	0.15	-0.02
指導者	40	4.78	0.48	34	4.82	0.46	0.44	-0.05
満足度 スクール料	39	4.00	1.00	34	4.44	0.82	2.03*	-0.44
練習内容	39	4.15	0.90	34	4.47	0.66	1.68	-0.32
練習時間	40	3.83	1.04	34	3.94	1.07	0.47	-0.12
総合満足度	39	21.36	2.60	34	22.32	2.17	1.70	-0.97

注1. 満足度の練習環境、指導者、スクール料、練習内容、練習時間、平均値の幅は1～5であり、1不満、2、3普通、4、5満足を示している。

注2. 総合満足度の平均値の幅は5～25であり、満足度5項目の総和を示している。

注3. *p<.05、**p<.01

注4. 平均値の差は2016年度平均 (I) -2017年度平均 (J) の値を示している。

表8 D校の満足度年度比較

	2016年度			2017年度			t 値	平均値の差 (I-J)
	n	平均 (I)	SD	n	平均 (J)	SD		
練習環境	16	4.19	1.05	16	4.13	0.89	0.18	0.06
指導者	16	4.38	0.96	16	4.56	0.73	0.62	-0.19
満足度 スクール料	16	3.50	1.03	16	3.50	0.97	0.00	0.00
練習内容	16	3.75	0.78	16	4.13	0.81	1.34	-0.38
練習時間	16	3.13	1.26	16	3.44	0.89	0.81	-0.31
総合満足度	16	18.94	3.70	16	19.75	2.44	0.73	-0.81

注1. 満足度の練習環境、指導者、スクール料、練習内容、練習時間、平均値の幅は1～5であり、1不満、2、3普通、4、5満足を示している。

注2. 総合満足度の平均値の幅は5～25であり、満足度5項目の総和を示している。

注3. *p<.05、**p<.01

注4. 平均値の差は2016年度平均 (I) -2017年度平均 (J) の値を示している。

表9 E校の満足度年度比較

	2016年度			2017年度			t 値	平均値の差 (I-J)
	n	平均 (I)	SD	n	平均 (J)	SD		
練習環境	48	4.58	0.71	50	4.66	0.69	0.54	-0.08
指導者	47	4.57	0.68	50	4.42	0.88	0.96	0.15
満足度 スクール料	48	3.69	0.85	50	3.98	1.04	1.52	-0.29
練習内容	47	3.89	0.79	50	3.96	0.97	0.37	-0.07
練習時間	48	3.56	1.03	50	3.62	1.01	0.27	-0.06
総合満足度	46	20.22	2.86	50	20.64	3.61	0.63	-0.42

注1. 満足度の練習環境、指導者、スクール料、練習内容、練習時間、平均値の幅は1～5であり、1不満、2、3普通、4、5満足を示している。

注2. 総合満足度の平均値の幅は5～25であり、満足度5項目の総和を示している。

注3. *p<.05、**p<.01

注4. 平均値の差は2016年度平均 (I) -2017年度平均 (J) の値を示している。

表10 F校の満足度年度比較

	2016年度			2017年度			t 値	平均値の差 (I-J)
	n	平均 (I)	SD	n	平均 (J)	SD		
練習環境	38	3.82	1.09	35	3.77	1.14	0.17	0.04
指導者	38	4.18	0.96	35	4.54	0.78	1.74	-0.36
満足度 スクール料	38	3.79	1.02	35	4.00	0.97	0.90	-0.21
練習内容	38	3.76	1.00	35	3.89	0.99	0.52	-0.12
練習時間	38	3.16	1.20	35	3.57	1.12	1.52	-0.41
総合満足度	38	18.71	3.75	35	19.77	3.77	1.20	-1.06

注1. 満足度の練習環境、指導者、スクール料、練習内容、練習時間、平均値の幅は1～5であり、1不満、2、3普通、4、5満足を示している。

注2. 総合満足度の平均値の幅は5～25であり、満足度5項目の総和を示している。

注3. *p<.05、**p<.01

注4. 平均値の差は2016年度平均 (I) -2017年度平均 (J) の値を示している。

はないだろうか。

IV. まとめ

本研究はドラゴンズベースボールアカデミーの保護者を対象に第一に2017年度における満足度の変化を明らかにすること、第二に2017年度の各スクールにおける総合満足度の差を明らかにすることの2点であった。調査対象者はアカデミーに通う生徒の保護者で5項目のプログラム満足度とそれらの総和である「総合満足度」の結果から年度毎とスクール毎の比較を行った。その結果、以下に示す2点が明らかとなった。

1) 2016年度と2017年度の満足度比較（総合/各項目）

「総合満足度」において、2016年度よりも2017年度の満足度が向上した。また「指導者」「スクール料」「練習内容」「練習時間」の4項目で、2016年度よりも2017年度の満足度が向上した。アカデミー事業が2年目を迎えた指導者の経験知向上による影響と「プログラム修正」の効果が満足度の向上を導いたと考えられ、アカデミー全体としての取り組みが好影響を与えていることを示したのではないだろうか。今後、具体的な効果を検証することが求められる。

2) 各スクールの満足度の比較（総合）

最も「総合満足度」が高かったスクールはC

表11 2017年度各スクールの総合満足度の比較

	スクール (I)	平均値	標準偏差	スクール (J)	平均値の差 (I-J)	t 値
総合満足度	A 校	21.24	2.89	B 校	-0.05	0.76
				C 校	-1.08	1.70
				D 校	1.49	1.75
				E 校	0.60	0.77
				F 校	1.47	1.72
				A 校	0.05	0.76
	B 校	21.29	2.69	C 校	-1.03	1.80
				D 校	1.54	2.00*
				E 校	0.65	2.00
				F 校	1.52	1.99*
				A 校	1.08	1.70
				B 校	1.03	1.80
	C 校	22.32	2.17	D 校	2.57	3.76**
				E 校	1.68	2.66**
				F 校	2.55	3.46**
				A 校	-1.49	1.75
				B 校	-1.54	2.00*
				C 校	-2.57	3.76**
	D 校	19.75	2.44	E 校	-0.89	1.12
				F 校	-0.02	0.02
				A 校	-0.60	0.77
				B 校	-0.65	2.00
				C 校	-1.68	2.66**
				D 校	0.89	1.12
E 校	20.64	3.61	F 校	0.87	1.07	
			A 校	-1.47	1.72	
			B 校	-1.52	1.99*	
			C 校	-2.55	3.46**	
			D 校	0.02	0.02	
			E 校	-0.87	1.07	
F 校	19.77	3.77	A 校	-1.47	1.72	
			B 校	-1.52	1.99*	
			C 校	-2.55	3.46**	
			D 校	0.02	0.02	
			E 校	-0.87	1.07	
			A 校	-1.47	1.72	

注1. 総合満足度の平均値の幅は5~25であり、満足度5項目の総和を示している。

注2. *p<.05、**p<.01

注3. 平均値の差はスクール (I) - スクール (J) の値を示している。

校で、ついでB校であった。C校と差が認められたのはD校、E校、F校で、B校と差が認められたのはF校であった。フランチャイズ事業としてサービスの質を維持していく上で、より詳細な調査と分析が求められると共に、スクール間の横の繋がりが構築、強化されることが望まれる。

以上のように、年度比較では「プログラム修正」が一定の効果を生みアカデミー全体の満足度評価の向上に影響を与えたことが観測できた。単純なアンケート調査であったが、PDCA

サイクルに組み込み、改善策を講じたことで効果的に働いたと考えられる。加えてPDCAをそれぞれ単体ではなく、サイクルとして巡回させ次年度に生かす一つのモデルとしての有効性も確認できた。一方で「プログラム修正」の影響が、統一した効果として現れたわけではなかったため、フランチャイズ事業として価値やサービスを統一する、より詳細なマネジメントが必要であることが考えられた。また「プログラム修正」の内容について意見を求めた調査ではなかったため、それらが直接的に効果を生み出し

たのかを明らかにすることはできなかった。

最後にこれらの結果について、本アカデミーの現場で実働指揮をとり事務局としても活動するマネジメントスタッフ1名に確認してもらった。その結果、調査結果はマネジメントスタッフの主観的な評価に近く、また「プログラム修正」の効果を反映していると捉えたことができたとの回答を得た。前述した課題も踏まえ、2018年度もこのアンケート調査を実施し、ドラゴンズベースボールアカデミーのマネジメントの中核を担う活動として、継続して取り組むことが確認された。今後、数年間継続していくことで、より長期的な視点でのPDCAサイクルを巡回させることができ、より有効なマネジメントを導き出す事例研究となることができるのではないだろうか。そしてその蓄積が、野球人口減少阻止に多少なりとも、貢献することを願う。

謝辞

今回、調査にご協力いただいたドラゴンズアカデミー生徒の保護者の皆さまに暑く御礼申し上げます。また質問紙調査の実施、データ収集に協力してくれた金丸佳可、倉地佳那子、鷺坂美友、佐分利恵美の4名にも心から感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 広尾晃編：野球崩壊 深刻化する「野球離れ」を止めろ!。イーストン・プレス、2016.
- 2) 広瀬一郎編：スポーツ・マネジメント理論

と実践。東洋経済新聞社、2009.

- 3) 石田和之、倉俣徹：ジャイアンツアカデミーにおける技術指導。第2回野球科学研究会大会報告集：39-40、2014
- 4) 井澤悠樹、松永敬子、永吉宏英、長積仁：Jリーグに所属するクラブが進めるホームタウン推進事業のプログラム評価Ⅰーヴィッセル神戸サッカースクールの新規生徒と継続生徒の比較一。大阪体育大学紀要37:73-83、2006
- 5) 小寺昇二：スポーツビジネスマネジメント劇的に収益力を高めるターンアラウンドモデル、日本経済新聞社、2009.
- 6) 松永敬子、井澤悠樹、永吉宏英、長積仁：Jリーグに所属するクラブが進めるホームタウン推進事業のプログラム評価Ⅱーヴィッセル神戸サッカースクールの新規生徒と継続生徒の比較一。大阪体育大学紀要37:84-95、2006
- 7) 二瓶雄樹、村山台基：プロ野球アカデミーの満足度とその改善事例ー2016~2017年ドラゴンズ・アカデミーの取り組み一、第5回野球科学研究会大会報告集:156-157、2017
- 8) NPO法人ドラゴンズベースボールアカデミー HP:<http://www.kidsdragons.net/>
- 9) ジャイアンツアカデミー HP:<http://www.giants-academy.jp/>
- 10) 読売巨人軍アカデミー事務局：アンケート調査結果。NEXT GENERATION BASEBALL GENERATION アカデミー通信 23：1-4、2014